

自註両吟「おほなみの巻」

東都黄金井之隠士宇虚人  
新治筑波山破戒坊主獄雨

起首＝平成二十三の歳、弥生二十日あまり二日  
満尾＝同じ歳の卯月四日

〈初表〉

おほなみのあささへずりのこともなし 宇虚人

平らかに成るといふ年の二十三歳弥生十日あまり、国を傾くる大地震大津波あり。  
騒然たる末世春秋のおやぢ之を見てはその筆法いかにや

いかまほしきと亀の鳴くこゑ 獄雨

筑波大図書館にて、韓本読みはべるうちにおほなみに遭ふも、いと麗しきヨハクセン（女学生）と出奔。さて伊勢芥川と思ひきや女黙して去る。いや命あればこそと思ひなおしける折、桐壺更衣の歌を思ひて

朝鮮の野遊びはなほ夢にして 宇

獄雨うし筑波の文蔵にしてあやふく難を逃れ、棚より落ちたる書物のはざまに  
辛うじて高麗の夢を結ぶといへるに

液晶テレビの君が袖振る 雨

額田王もサムスン・LGの3D液晶で見ればさらに麗し

メイドらの声かまびすし夏の月 宇

液晶テレビの君と見えしは秋葉が原の狸女なりけらし

濯げば白し早乙女の脛 雨

古今東西、かまびすしいのは娘っ子、かまへて太一の君ではありませぬぞ

〈初裏〉

竹皮に三つ四つ見ゆる塩結び 宇

女の白脛には仙人爺も通力を失ふとかや。されば色好みの魂早乙女の腰をまじまじと  
眺めたれば、豈図らんや色気よりも喰ひ氣と見ゆ

復員列車に刑事も飛び乗る 雨

昭和の匂ひには横溝正史風の世界こそ。すけきよ様もご照覧あれ

トンネルの闇に取る手の身に沁みて 宇

刑事は誰を追うや、その片隅に道ならぬ恋の奴、みそかに闇を喜ぶなるべし。  
身に沁みたるは女の手の湿りか、秋風のあはれか

秋灯消せば今日は親の日 雨

親の命日とあらば遊女は身を売ること適はず

網一振りやんまを捕りてくれしこと 宇

懐かしや秋の日過ぎたる時再び来たらず、悲しき追懐に一掬の涙垂る

舳に群鰯跳ねる／＼ 雨

鰯の大漁は津波の前兆とや、あな恐ろし

見よや今雲の機手《はたて》に月の海 宇  
 大漁の大旗今や帰帆の舳にはためくなるべし

ビリーザキッドは左利きなり 雨  
 キッドゆえ飛び過ぎました、獄雨新案抜け風キッド付け

この縄を緩めてくれろとをろがみて 宇  
 このビリーザキッドの付け味やや理解に苦しむところありけれど

竹組む土手に春草の這う 雨  
 先師曰、何事も少し緩めがよろしからん

花のもとに犬のふぐりぞ慮外なる 宇  
 竹組むとは幔幕たてむとの心か見えしが、やや、そこなる草の名のあやふさよと、  
 一驚しはべりけるに、宇虚人珍案の慮外付けとはこれなるべし

春泥跳ねし美少の紅顔 雨  
 こちらも負けず恐ろしきコウガン付け、帰りなんいざ貞門へ  
 〈名残の表〉

平中の古写本少々傷ミ有 雨  
 平中、そら泣きせんとして顔に墨塗りし話など思ひ浮かべられよ

まめなりけらしをこなりけらし 宇  
 貞門をくぐりぬけて、一気呵成に宗鑑が余涎を舐る歟、笑ふべし尊ぶべし。喝

防災の品詰め過ぎて開かぬ箱 雨  
 過ぎたるは猶及ばざるが如し、さらに一喝

暗夜の火燵声食ひ締むる 宇  
 計画停電とやらにて、計画になき子ぞ出で来るにや。かわゆやかなしや

ねんねこもオートクチュール今昔 雨  
 仏大統領来日す。日仏野合記念、天晴れ猿居士！

それはなんやと齒せせるおやぢ 宇  
 せっかくオートクチュールの御挨拶ながら難波屋台のおやぢ殿には、とんと猫に小判  
 の面持ちならん。笑ふべし

妖刀は二尺三寸虎切丸 雨  
 あまりに鮮やかに切られたる故、切られし本人とんと気付かず（落語・辻斬り）

四條流儀は鱸五枚に 宇  
 虎切丸か見えしは、庖丁の親方襷掛けにて俎板の鱸を打つと見えたり。  
 さては刺身に作るや焼き物にするや。いずれむまさうなる手際めでたし

はばかりさんおぶう一杯放生会 雨  
 殺生したらあきまへんえ、たまには陰徳つまな

国司の船は霧を分け来る 宇  
 土佐より上れる前国司ながし、山崎の橋より男山を拝すと雖も、  
 それは如月これは秋霧、俳諧の早口ここを以て知るべし。

善隣の月に芳洲維翰の讃 雨

申維翰、朝鮮通信使なり。芳洲と男色論ありて日本の男色風俗を批判す。ところが小生、朝鮮國に男色の風瀰漫せしこと、昨今発見す。その文献持ちてカマトト國へいざ乗りこまん

扇逆しまに日東【じっとう】の天 宇

かつて朝鮮通信使権伏石川丈山と筆談の砌、丈山の詩を和臭なしと絶賛せし故事あり。丈山の代表作、覆醬集劈頭の七絶一首「富士山」は広く漢土の文人の愛誦するところとなりけるを思ひ出でて

〈名残の裏〉

南無八幡源平餅も海に散る 雨

与一の矢にて海へさつとぞ散つたる紅白餅、もったいなや

ただ焼芋を喰うて屁をこく 宇

乃木將軍那須野に隱棲の折、さる客に与へて曰く、「為すこともなくて那須野に住む我は茄子とうなすを喰うて屁をこく」と。名吟よくよく服膺すべし。以てここに引く。

源平の将もまた、戦はてては、鳴門の野に芋など食ひつつをるか。呵呵

昆陽の玄孫と言ふ御乳の人 雨

甘藷先生、芋神様も代替わりすればただの人

肌すべらかに春のブラウス 宇

いかになんでも、江戸の空気を離れでは句柄なづみ候につき、敢てブラウスと作り侍る

花あかりピアノの音のみ響きおり 雨

エリーゼのために、いやここはやはりランゲの花の歌なるべし

夕べうららに鎮魂の曲 宇

おほなるの巻、さへずりに旅立ちて幾山河、巻軸つひに鎮魂の曲を聴きたり。

天上の尊靈之を聴くや否や